

日本に現存する
最古の和歌集「万葉集」を
わかりやすく紹介します



橘諸兄の 雪かき

この歌は、天平十八(七四六)年正月に白雪が降り積もり、左大臣であった橘諸兄が諸王や高官らを連

降る雪の白髪までに
大君に仕へまつれば 貴くもあるか

訳

降る雪の如き白髪になるまで大君にお仕え申すと、畏れ多いことです。

橘諸兄 卷十七(三九二二番歌)

れて元正太上天皇の御殿に参上して雪かきをしたときに詠んだ歌です。雪かきの後に太上天皇主催の宴が催され、「雪」をテーマにして歌を詠むように命じられたとあります。

当時、諸兄は六十三歳でした。この歌では、自らの白髪を目の前の雪の白さにたとえて、元正太上天皇を貴び敬う気持ちが表現されています。

同じ時に詠まれた葛井諸会(あひ)の歌に「新しき年のはじめに豊の年しるすとならし雪の降れるは」(三九二五番歌)とあるように、雪は豊作をもたらすと考えられていました。雪をめりたいものとする発想は『宋書』や『文選』の影響であったとみられます。

さらに、他にも歌が詠まれたがその場で書き残さなかったのだからなくなつてしまった、とも記されており、従三位であった藤原豊成や正四位上であった藤原仲麻呂、従五位下

であった大伴家持(おとものやかもち)など、同席した人々の名前が列挙されています。

現代では、家持が『万葉集』の編纂に関わっていたと考えられていますが、十一世紀の『栄花物語』には、諸兄をはじめ諸卿大夫が集まつて編纂したとあります。諸卿大夫とは三位以上と四・五位の官吏を指し、雪かきに招集されていた人々をほうふつさせます。

雪かきをした七四六年頃、諸兄の権力はすでに衰えを見せていました。『続日本紀』によれば、七五五年に不穏な振る舞いがあったと密告されて辞職し、七五七年に没しています。諸兄の子である橘奈良麻呂も、同年に謀反を密告され、獄中で亡くなつたとみられますが記録すら残っていません。橘諸兄の没後、橘奈良麻呂の変を経て、藤原仲麻呂の専制体制が確立しました。

(本文 万葉文化館 井上さやか)

特集

県民ニュース

奈良を知らろう

暮らしに役立つ

お知らせ

万葉ちゃんの

つぶやき

和歌や作者などに関連するものを紹介するよ!



万葉ちゃん

万葉集と植物

『万葉集』には橘諸兄の歌が今回の歌以外にも数首取められています。その中にはアジサイやナデシコなどの植物を詠んだ歌があります。

『万葉集』には多くの植物が詠まれており、もつとも多く詠まれているものがハギで、一四一首にみられます。ハギという文字は万葉集では「萩」ではなく、「芽子」という文字が多く使われています。ハギの他にも、ウメ、マツ、タチバナ、サクランボなども多く詠まれています。

現代でも見ることが出来る植物が多いので、皆さんも植物を見て、万葉の時代に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

「はじめての万葉集」でも過去にカキツバタやツバキなどを詠んだ歌を紹介したよ。

